学　位　論　文　要　旨

学位論文題目

文芸雑誌『白樺』の美術的要素に関する研究

西　村　修　子

本研究は、明治後期から大正時代にかけて刊行された文芸雑誌『白樺』の美術的要素に焦点を当て、『白樺』が日本の美術に及ぼした影響を検討し、当時の美術活動に与えた意義を考察するものである。西洋美術の移植に尽力した『白樺』は、新しい日本の美術を展開するための有益な資料であったと考えられる。本論文では、雑誌『白樺』に美術の視点から踏み込んで、『白樺』の美術に対する精神を解き明かすことによって、『白樺』が美術における啓蒙的な役割を担ったことを検証していく。

白樺派の人々は西洋美術の移植に意欲的であり、『白樺』誌上において西洋と東洋の美術批評や論考、挿絵を掲載し、白樺美術展覧会を開催して日本の美術を啓蒙し続けた。雑誌『白樺』は、明治のアカデミズムから大正の自由教育への変動の中で、関東大震災までの 13 年 5 カ月間、白樺派の信念である個性尊重と理想主義の精神を貫き通して継続したのである。

本研究では、『白樺』が西洋美術をいかにして受容し、個性的な美術雑誌として継続したかに着眼し、時代背景と国家の体制に屈することのない『白樺』の精神を検討すると共に、さまざまな批判や問題点が指摘される白樺派の論理を看過することなく検証することにより、白樺派が関与した美術が後世に与えた影響を探究した。それによって白樺派の美意識が明白となり、『白樺』が採り入れた西洋と東洋の美術の本質を解明した。また『白樺』に参加した画家たちの数々の絵画制作と展覧会が、画家と『白樺』の相互の高揚のみならず、当時の読者や美術家たちに与えた訴求効果を本質的に解明し、当時の時代背景と『白樺』の関連、及び西洋と東洋の中での『白樺』の位置づけを確認した。そのことから『白樺』の特質を抽出し、後世への影響に焦点をあてて考察した。

筆者は『白樺』の大きな流れを把握し、考察・展開するために、『白樺』の中心人物である武者小路実篤の美術観と、『白樺』の編集に携わった柳宗悦の美術に関する思想と活動に注目し、さらに『白樺』と係わり、自らの美術を確立した岸田劉生の三者に基軸を置いて論述していく。

本論文は五章により構成される。序章には、『白樺』の美術に対する精神を解き明かし、『白樺』の美術における啓蒙的役割を検証するべく、問題提起をした。

第一章で『白樺』の沿革を述べ、白樺派の形成プロセスを検討する。また、『白樺』の特色

として西洋美術家との係わりと同人たちの美術に対する認識を探った。同人たちが『白樺』を美術雑誌としても通用する為の努力を重ねることができたのは、個性を生かすべく、高い理想と堅い友情で結ばれていたからであった。さらに当時は大部分が写真複製画による美術展覧会であったため、当時の複製美術の採り入れと効用を論じ、日本人の複製美術に対する概念を検討した。

第二章において、白樺派の美術観や受容の方法を検証し、美術的意義を述べた。そのため、特に中心人物のひとりである柳宗悦の美術観を述べ、柳が『白樺』誌上に展開した西洋美術の啓蒙と、後の朝鮮民族美術の論考を検討したうえで、西洋美術に造詣の深い柳が東洋美術や工芸へと緩やかに移行していった経緯についても考察した。

第三章として、『白樺』の美術的内容に焦点を当てて考察し、『白樺』の採り入れた西洋美術が、どのようにして日本の美術家に摂取されていったかを検証した。また、『白樺』の文学者と美術家各々の西洋美術に関する認識の相違と相乗効果を検討し、当時の美術活動との関連を探っていった。さらに『白樺』同人たちが傾倒していた彫刻家のロダンとの関わりについて述べ、白樺主催でロダン展を開催しようと計画した事の顛末を論じた。

第四章では、『白樺』における美術の誌上論争として「絵画の約束論争」について考察した。そのことで美術評論家の木下杢太郎と、画学生の山脇信徳との絵画における概念の相違を提示し、系統的な美術の摂取と日本の急激な西欧化に関する問題点を顕在化することとなった。

また第五章では、旺盛な美術活動によって当時の若い画家たちに刺激を与えた画家、岸田劉生の論考と画業に注目し、岸田が著した『図画教育論』の教育方法を検討した。さらに『白樺』に触発され、感化された岸田の作品が、西洋美術から宋元の東洋美術に傾倒した後、日本の浮世絵に回帰したことを検証し、それらが当時の美術活動に与えた影響を考察した。

終章において『白樺』の啓蒙的役割とその精神を明確にするべく、明治中期のフェノロサと岡倉天心が当時の図画教育に多大な影響を与えたことを述べた。『白樺』が東洋回帰を為した背景には、日本美術の保護を推進したフェノロサと岡倉の活動があり、『白樺』全体の流れを概観すると、『白樺』と日本の美術教育は、呼応し共鳴するかのように変遷しているのである。さらに「絵画の約束論争」においても、美術教育との関連を指摘することができる。画家や美術教育者たちは、山脇の作品に新しい見方や斬新な描写を見出したのである。また白樺派の精神には、確固とした自己中心性があり、優れた作品には優れた人格が宿るという理想主義が内包されていると考えられる。白樺派の人々は、明治、大正における美術の認識と価値観の相違を明白にしたのである。